

ぱびるす

第 28 号

香芝市真美ヶ丘 5-1-53

奈良県立 香芝高等学校

文化図書部

『声に出すとどうなるか』

校長

今西一盛

小説を読んでいると、声に出してみたくなるセリフに出会うことがあります。

たとえば、「その声は我が友李徴子ではないか」。袁修は草むらに隠れた虎のつぶやきを聞き、驚きながらも思い当たって叫ぶのです。袁修は懐かしくて懐かしくて、たまらず、叫んだのだと推察されま

す。この叫びはどれくらい音量だったのでしょうか。『山月記』は悲劇的な李徴の人生に焦点をあてがちですが、旧友の声を忘れずにいた袁修の人生に思いを馳せてみるのも楽しい想像です。

その声は、荒れ果てた『羅生門』の楼上に反響するほどだったのでしょうか。

そして、「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」。先生は、Kの恋の行く手を塞ごうとして、利己心を発現させて言い放ちます。この声のトーンは、どれくらいの高さだったのでしょうか。緊張も昂揚もあつたと思像されますが、自分の『こころ』を見透かされないように、努めて冷静に、冷徹に言い放つたのではないかと、僕は想像しています。

以前、小学校の国語の授業を拝見した時に、教室の掲示物に「声のものさし」があるのに気付きました。今年度は、コロナ禍のために、声をそろえて朗読したり、口角泡を飛ばすような激論を交わしたりする機会は奪われてしまいました。声には、場所や状況に

応じた、相応しい音量やスピードがあることを、我々は小さい頃から学んでいます。



一方で、AIの進化によって対話型ロボットが最近次々と開発されています。「いらっやいませ」と話す自動販売機は既にあちこちで見られますし、音声認識する対話型ロボットが、介護や子育ての場面で重用されているという話もよく聞くようになりました。

少し前に、『ヒトの言葉 機械の言葉』（川添愛著 角川新書）という本を読みました。AIは、文字や音や画像を「数（数の並び）」として扱う代物なので、

音声の波を表現する「数の並び」を入力すると、それに対応する言葉を表す「数の並び」を出力しているのだそうです。肉声は「数の並び」に置換されていくことに、時代遅れの文型人間は、違和感や空恐ろしさを感じてしまいました。著者は、「少なくともこれからまだしばらくは、機械が人間と同じように言葉を理解できるようにするのは難しい」と安堵させてくれています。が、「千円からいただきます」などと無機質に話すコンビニロボットが登場するのも、そう遠くはない気がします。

面倒なことをすべてAIに任せようとする最近の風潮は、人間から「生きた声」さえも奪ってしまうのではないかと心配になります。彼らに、自動音量調整機能やトーンコントロール装置があるのかどうかは知りませんが、彼らは、前述の『山月記』や『羅生門』の中のセリフをどう発音するのでしょうか。聞いてみたい気もするし、確かめるのが怖い気

もします。ヒトが大事にしたい美德のひとつに、挨拶の励行があります。願わくは、香芝高校生が発する「おはようございます」「こんにちは」が、機械的な音に墮さないで欲しいと思います。相手と向き合い、相手に応じて、さまざまなバリエーションで思いを届ける「生きた挨拶」であって欲しいと願います。今しばらくは、マスク越しではあるものの。

卒業生に贈る

この一冊

『青春をどう生きるか』 学年主任 福谷智志先生

（加藤 諦三著）

「いまやらなくていつやる」これがこの本の主題です。今、皆さんは将来への期待や憧れと同時に不安や心配が渦巻いている頃かもしれません。「いったい自分は何を考慮しようとしているのか」がわからなくなることがあるかもしれません。そんなときに生きる指針と勇気を与えてくれるのがこの本です。今、ここにおいてできることをやる。声を出すだけでもいい。「元気だから声を出すんじゃない、声を出すから元気になるんだ」